

Hello Again

佐藤 宗太

1	2
岩手県釜石市浪板海岸（早朝）	陽介のアパート 駐車場＋部屋内
誰もいない海岸。 津波の被害を受けたとは思えない ほど穏やかで、静かに寄せては返 す波の音だけが辺りに響いている。 突堤の先に置かれた空の花瓶。 風に倒される気配もなく、静かに 佇んでいる。	木造の二階建てアパート。 玄関の前に駐車場があり、軽トラ ックが一台停まっている。 部屋内。 アラームが鳴る。 スマホ画面・3月9日 日曜日 5..00 陽介、すぐに目を覚ましアラーム

×	を止める。	×	洗面所で顔を洗い、歯を磨く陽介。	×	片手鍋が置かれたコンロに火がつく。	陽介、茶碗に白米をよそい塩昆布をひとつまみ乗せる。	コンロの火を止め、湯気が微かに立っている状態の出汁を鍋から茶碗に注ぐ。	唇で温度を確かめてから立ったままかきこむ。	×	×	×
---	-------	---	------------------	---	-------------------	---------------------------	-------------------------------------	-----------------------	---	---	---

洗面所で電気シェーバーを使い髭を剃っている陽介。

×

×

×

レ
ー
カ
ー
に
着
替
え
て
い
る
陽
介
。

×

×

×

玄関で靴を履いている陽介。

プラスチック製のバケツが横に置かれており、中には鉄製の長いトングとゴミ袋が数枚入っている。

×

×

×

駐車場。

陽介、バケツを持った状態で部屋を出てくる。

4	3
閑静な住宅街＋車内	車内
陽介「玻璃（はり）の海。」 車が発進する。 数秒の沈黙。 かける。 シートベルトを締め、エンジンを る。 運転席の車窓になるように調整す あるアームを伸ばして配信映像が ダーにスマホを設置し、伸縮性の ハンドル横に取り付けられたホル を開き配信を開始する。 陽介、スマホのライブ配信アプリ	軽トラックの荷台にバケツを置き、 運転席に乗り込む。

	5	閑静な商店街＋車内 陽介「海辺の村にカヤという若い女性が住んでいた。カヤの住む村にはとある不思議な言い伝えがあった。」 ――『玻璃（はり）の海には思いのかけらを運ぶ精霊が現れる』と。」 車内。 除をしている。 一人のおばあさんが店前の掃き掃除をしている。 シャッターが閉まった商店街を陽介の軽トラックが進んでいく。 音を控えめに響かせながら進んでいく。 道に陽介の軽トラックがエンジン宅街。まだ人の気配の少ない細い朝靄（あさもや）の残る静かな住宅街。 車内。 運転をしている陽介。
--	---	--

運転をしている陽介。

陽介「玻璃の海。それは夜明けの限られた時間だけ、波打ち際がまるでガラスのように透き通り輝く現象のこと。村の人々はそれを神秘と呼んだが、誰もそれ以上のことは信じていなかった。」

配信画面には車窓からの景色が流れている。

視聴者数は0。

陽介「カヤは毎朝、その海に立ち続けた。

理由は自分でも分からない。ただ、何かを探している気がしてならなかった。

ある朝、カヤは波打ち際にきらめく小さなものを見つけた。それはガラスのように透き通った花卉のような器で、溜まった海水の中にふわりと光る文字が浮かんでいた。

『私の居場所を、ずっと探してる』

手に取った瞬間、器はふっと溶けるように消えた。不思議と温かい感触がカヤの心を静かに満たしていた。」

開けた道＋車内

商店街を抜け、開けた道を陽介の軽トラックがスピードを上げて進んでいく。

青信号の灯る交差点。前方には上り坂の道路が続き、その先は山々に囲まれている。人の姿はない。

車内。

運転をしている陽介。

陽介「次の日も、その次の日もカヤは器を拾い続けた。その文字はどれも短い。

でも、確かに誰かの“思い”だった。

『少しだけど、会話ができた。』

『今日、泣かずに笑えた。』

陽 介	「	その日の朝、カヤははじめて自分の	思いを器に込めた。
陽 介	「	けれど、どれも手にした瞬間、ふつ	と消えてしまう。その代わり、カヤ
		の心に思いが残っていた。	ある日の夜、カヤの夢に青い光りを
		まとう小さな精霊が現れた。その精	霊は何も語らずカヤに器を手渡す。
		その瞬間、カヤの心に誰かと繋がる	ような感覚が宿った。精霊は優しく
		微笑み、ずっと消えていった。」	トンネルに入る。
		配信画面には車窓からの景色が流	れている。
		視聴者数は0。	

海辺に立ち、祈るように手を合わせると、手の隙間から光が漏れ出してくる。手を開くと、その光が貝殻の形をとった。『誰かの思いに救われました。ありがとう。』車がトンネルを抜ける。景色が開けると、車の右手に波板海岸が広がっている。陽介「カヤはそれを玻璃の海に浮かべた。器はすぐに波にまぎれ、遠くに消えていった。数年後、朝焼けに照らされた波打ち際に一人の少年が立っていた。その少年が海から拾い上げたのは、貝殻の形をした光る器。少年はそれを大切そうに抱き、優しく微笑んだ。」

陽介「出会うことはなかったかもしれない誰かと、確かに繋がっている。それだけで、世界は少しだけ優しくなる。ガラスの海はその日、いつもより長く輝いていた。」	配信画面には海が広がっている。	視聴者数は0のまま。	陽介、一呼吸置き配信を終了する。	車を降りる。	×	×	×	誰もいない海岸。	曇天の下に広がった海はガラスチック製	とは程遠い。	浜辺を歩きながらプラスチック製
陽介、海岸沿いの道路に車を寄せて停車する。	エンジンをとめて、シートベルトを外す。										

陽介「…（違うか）」	面	岩	拾	上	岩	し	ゴ	岩		×	陽	の	ゴ	ミ	の
陽介、長財布をバケツの中に入れてる。	の汚	のく	った	げる	場の	てい	ミを	場を			介、	袋な	ミ袋	拾い	バケ
	れを	ぼみ	のは	。	隙間	る様	拾う	を歩		×	、	どが	には	をし	ツ、
	洗	にで	茶色		に何	子。	とい	いて			また	溜ま	ペッ	てい	鉄製
	流	きた	い革		かを		いう	る陽		×	一つ	っ	トボ	る陽	のト
	す。	水た	製の		見つ		より、	介。			ゴミ	てい	トル	介。	ング
		まり	の長		け、		何か				を拾	る。	やお		を持
		で表	財布		拾		を探				う。		菓子		ちゴ

8											
水産加工工場	駐車場										

	10		9	
× × ×	洋介のアパート 駐車場＋部屋内	まいそう。 その光は数時間後には全て消えし 点々としている。 家の灯りや街灯、車のライトが	釜石の街並み 実景（夜）	陽介、車から降り、トミタ水産と バックプリントされた白いジャン パーを着て職場に向かう。

1 1															
か れ た ホ ワ イ ト ボ ー ド の 隅 に あ る	映 画 の 企 画 ア イ デ ア が び っ し り 書 か れ た	大 学 映 画 サ ー ク ル 室 （ 昼 ） 【 十 四 年 前 】	3 ／ 1 0 ＼ 3 ／ 1 6 と 書 く 。	に 組 み 立 て 、 側 面 に 油 性 ペ ン で	新 し い 段 ボ ー ル を 取 り 出 し 、 箱 型	て い る 。	箱 に は 3 ／ 3 ＼ 3 ／ 9 と 書 か れ	財 布 を 入 れ る 。	ボ ー ル 箱 を 開 き 、 洗 っ て 乾 か し た	陽 介 、 テ ー ブ ル の 上 に 置 か れ た 段	×	陽 介 。	中 で 今 朝 拾 っ た 財 布 を 洗 っ て い る	風 呂 場 で バ ケ ツ に 水 を 溜 め 、 そ の	部 屋 内 。
											×				
											×				
											×				

「3 / 10 / 3 / 16 陽介釜石取
 材」の文字。
 部屋全体の壁際には脚立や三脚、
 撮影機材のケースが立てかけられ
 ており、机の上には、DVDや小
 説、脚本などが積み重ねられてい
 る。
 整理されていないわけではないが、
 綺麗ではない。
 カップラーメンにお湯を注ぐ陽介。
 タイマーを2分に設定しスタート
 ボタンを押す。
 物が散乱するテーブルにスペース
 を空けノートPCを開く。
 杏奈、リュックを背負って室内に
 入ってくる。
 杏奈「おつかれさまー」
 陽介「おつかれー」
 杏奈「これ、なんの取材？」
 杏奈「ホワイトボードを見る。」

陽介「コンペに出す小説の取材。映像化も
視野に入れて行つてこいつて加藤
先輩が。」

杏奈「そうなんだ。一人で？」

陽介「うん」

数秒間の沈黙。

杏奈「私も行つていい？」

陽介「えゝ」

杏奈「だめ？」

好意を持っている相手からの誘いに戸惑う陽介。

一瞬下心が芽生えたが、杏奈に悟られないように取材のためだと割り切り平然を装う。

陽介「予定空いてるの？」

杏奈「空ける」

笑顔の杏奈。

困惑で声が出ない陽介。

杏奈「とりあえず、メアド交換しようよ！」

なぜかまだしてなかったし」

杏奈、ストラップが付いた白いガラケーを取り出す。

陽介、ストラップが気になる。

陽介「なにそれ？」

杏奈「これ？かめ子。かわいいでしょ！」

小さな亀のキャラクターのストラップ。

一見シンプルに見えるが、表情がムンクの叫びのようで可愛さは人を選ぶ。

陽介「……かわいいね」

杏奈、驚いた表情。

杏奈「……」

陽介「え……なに？」

杏奈、急いでリュックから筆箱を取り出し、筆箱についたかめ子のストラップを外し陽介に渡す。

杏奈「はじめてかわいって言われた」

陽介「……ありがとう」

1 3	1 2
車 内	陽 介 の ア パ ー ト 部 屋 内 ＋ 駐 車 場 （ 早 朝 ）
運 転 席 に 乗 り 込 む 。	苦 笑 い の 陽 介 。
荷 台 に 段 ボ ー ル 箱 と バ ケ ツ を 置 き	笑 顔 の 杏 奈 。
着 た 陽 介 が 部 屋 か ら 出 て く る 。	タ イ マ ー が 鳴 る 。
ネ イ ビ ー の ウ イ ン ド ブ レ ー カ ー を	
×	
×	
×	
5 時 0 0 分	
ス マ ホ 画 面 …	
3 月 1 0 日	
月 曜 日	
ア ラ ー ム が 鳴 っ て い る 。	
現 在 に 戻 る 。	

運転している陽介。
すでにライブ配信を始めている。
視聴者数は0。

原稿用紙に書かれた文章。
『誰かと話したいけれど、声が出ない。』

『今日、泣かずに笑えた。』

『明日が少し怖いときがある。』

癖はあるが綺麗な字。

深夜のファミレス。店内には二人
以外の客は二、三人程度。

ソファ席に座っている杏奈。

杏奈は玻璃の海の前稿を読んでい
る。

陽介、ドリンクバーでコーラとメ
ロンソーダを注いで持ってくる。

メロンソーダを杏奈の前に置く。

杏奈「玻璃ってなに？」

陽介「仏教用語で水晶のこと」

杏奈「へえ」

杏奈、原稿を読み進める。

杏奈「私この話好き」

陽介「ほんと？高一のときに書いたやつだ

から恥ずかしいけど」

杏奈「今より文章がったないところも好き」

陽介「だから恥ずかしいって」

微笑み合う二人。

陽介「それで、ほんとによかったの？」

杏奈「何が？」

陽介「宿のこと」

杏奈「しよーがないよ、急だったたし」

陽介「でも、付き合ってもいないのに同じ

部屋はね」

数秒の沈黙。

陽介、鞆からノートPCを出す。

陽介「やっぱりもう少し探してみるよ。キ

浪板海岸

ヤンセルあるかもしれないし、多少
遠くなくてもなんとかな：「

杏奈、ノートPCを閉じようとす
る。

杏奈「探して欲しくない：かも」

沈黙。

現在に戻る。

誰もいない海岸。

曇天の下に広がった海は玻璃の海

とは程遠い。

ゴミ拾いをしながら海岸を歩いて

いる陽介。

昨日よりゴミの量は少ない。

×

×

×

突堤の先に立っている陽介。

	1 7		1 6	
し寄せたことなど想像もつかない。 を知らなければ、ここに津波が押 た商店街、学校。かつての街並み は立て直された家々、再整備され まっすぐ伸びる道路。その両脇に ックが走っている。 釜石の街を陽介が運転する軽トラ	釜石の街並み十車内	落とし物と書かれた吊り看板。 陽介、3 / 3 3 / 9 と側面に書 かれた段ボール箱を窓口で渡す。	警察署 落とし物窓口（朝）	ガラケーを耳に当てている。 数秒後、何も言わずポケットにし まう。 足元に置かれたバケツの中には何 も入っていない。

ラジオ「おはようございます。三月十日月曜日、午前九時を回りました。今日はこの話題から：」

だが、目を凝らせば見えてくる。防波堤は空を切り取るように高く、海の気配を遮っている。空き地の一角、草むらに沈む古い基礎の跡。使われなくなった階段が行き場のないまま残されている。

ラジオ「明日で東日本大震災から十四年。もう十四年という人もいれば、まだ十四年と感じる人もいるでしょう」

慰霊碑の周りには今も新しい花が供えられ、足を止める人の姿がある。

ラジオ「今日は、あの日を経験した方から届いた声をお届けしたいと思います。どうか、いつもより少しだけ耳を

傾けていただけたら嬉しいです」
車内。
運転をする陽介。

陽介「…」

三陸鉄道リアス線 電車内（朝）

【十四年前】

陽介と杏奈以外は誰も乗っていない。
い。

陽介は取材用にオフィスカジュー
ルな服装、首から一眼レフカメラ
を下げている。

杏奈は青のワンピースを着ていて
旅行気分。

車窓から海が見えてくる。

杏奈、車窓から海を眺める。

陽介、カメラを構え杏奈の写真を撮
る。

20	19
高台の空き地	釜石市内のホテル 入り口【十四年前】
陽介「じゃあ、俺アポ取ってるから、終わったら合流ね」 杏奈「うん」 陽介「行く場所決めてるの？」 杏奈「とりあえず街を探索して、海岸散歩しようかな」 陽介「わかった。じゃあ、またあとで」 反対方向に歩いていく二人。 陽介、立ち止まって振り返り、カメラを構える。 遠ざかっていく杏奈の後ろ姿。 陽介、シャッターを切る。	荷物を置き、ホテルから出てくる 陽介と杏奈

浪板海岸（昼）【三年前】

現在に戻る。

曇天の下に広がる釜石の街が一望できる。

軽トラックの荷台に座り、コンビニ

におにぎりを食べている陽介。

喉に詰まり急いでペットボトルの

お茶を飲む。

陽介、息を整え、荷台に寝転がる。

曇天が広がっている。

陽介「…」

曇天。

仰向けで海に浮かんでいる陽介。

服も髪も乱れている。

海水で濡れて分かりづらいが、泣

いた跡が顔に残っている。

2 2 都 内 陽 介 の ア パ ー ト (夜) 【 三 年 前 】	陽 介 「 … 」 ワ イ シ ャ ツ を 着 た ま ま コ ン ビ ニ 弁 当 を 食 べ て い る 陽 介 。 ス マ ホ で ネ ッ ト ニ ュ ー ス を 見 る 。 芸 能 人 の 不 倫 、 議 員 の 汚 職 、 コ ロ ナ の 累 計 感 染 者 の 推 移 な ど の ニ ュ ー ス が 多 く あ る が 気 に 留 め な い 。 あ る 記 事 で 陽 介 の 手 が 止 ま る 。 ス マ ホ 画 面 … 岩 手 県 浪 板 海 岸 震 災 か ら 十 二 年 ぶ り の 海 開 き	2 3 陽 介 の 職 場 【 三 年 前 】	2 4 三 陸 鉄 道 リ ア ス 線 電 車 内 (朝) 【 三 年 前 】 陽 介 、 上 司 に 辞 表 を 出 す 。	陽 介 以 外 は 誰 も 乗 っ て い な い 。
--	---	---------------------------------------	--	------------------------------------

浪板海岸【三年前】

車窓から海が見えてくる。
 陽介、首から下げた一眼レフカメラを構える。
 誰もいない座席と車窓が入る画角。
 海も写っておらず決まりが悪い。
 陽介、シャッターを切る。

曇天の下に広がる海辺に佇む陽介。
 陽介以外は誰もいない。
 津波の被害を受けたとは思えない
 ほど穏やかで、静かに寄せては返す
 波の音だけが辺りに響いている。
 波がつま先まで押し寄せる。
 陽介「……」

陽介、涙が溢れ出してくる。
 止めようとするが、止まらない。
 その場にうずくまる陽介。
 次の瞬間、せきを切ったように

2 7	2 6
車 内	陽 介 の ア パ ー ト 部 屋 内 （ 早 朝 ）
現在に戻る。 アラームが鳴る。 スマホ画面・3月11日 火曜日 5…00 陽介、すぐに目を覚ましアラーム を止める。	海に向かって走り出す。 泣きながら、ただ自分の想いを海 にぶつける。 こんなことをしても、何も意味が ないことを理解しながらも感情に 身を任せる。 穏やかな空間に、陽介の声が響き 渡る。

閑静な商店街＋車内

陽介「玻璃の海」

運転席に乗り込む陽介。
 スマホをホルダーに設置しライブ
 配信を開始する。
 その瞬間、視聴者数の欄に1と表
 示される。
 初めての視聴者に驚きを隠せない
 陽介。
 呼吸を整え、普段通りを装う。
 軽トラックを発進させる。

シャッターが閉まった商店街を陽
 介の軽トラックが進んでいく。
 車内。
 運転している陽介。
 視聴者数1。

2 9	3 0
開 け た 道 ＋ 車 内	浪 板 海 岸
交 差 点 。赤 信 号 で 軽 ト ラ ッ ク が 止 ま っ て い る 。 車 内 。 陽 介 、ス マ ホ 画 面 を 見 る 。 視 聴 者 数 1 。 信 号 が 青 に 変 わ る 。	陽 介 、海 岸 沿 い の 道 路 に 車 を 寄 せ て 停 車 す る 。 エ ン ジ ン を 止 め て 、シ ー ト ベ ル ト を 外 す 。 視 聴 者 数 は 1 の ま ま 。 陽 介 、配 信 を 止 め ず に ス マ ホ を 持 っ た ま ま 車 を 降 り る 。 左 手 に バ ケ ッ 、右 手 に ス マ ホ を 持 ち 、海 に 向 か っ て 歩 い て い る 陽 介 。

遥「これ、お兄さんでしょ？」

遥、スマホのライブ配信画面を見せる。それは陽介の配信画面と同じ。

視聴者数は一人のまま。

遥「滝本遥といます。なんかいても立つ

遥の声「あの！」

陽介、配信を止めようとする。

深呼吸をする。

ないことを察している陽介。

コメントがないことから杏奈ではないかという期待があったが、

最初は杏奈が聞いてくれているのが流れている。

視聴者数は1のまま。

配信はまだ続いており、海の映像

てもいられなくて……」

陽介「……」

陽介の軽トラックの横に乗り捨てられた自転車。スタンドを立てておらず倒れた状態になっている。

×

×

×

海岸を歩く二人。

陽介がゴミ袋を持っていて、遙がトングを持っている。

遙「あの配信いつからやってるの？」

陽介「三年前かな」

遙「毎日？」

陽介「うん」

遙「どうして？」

陽介「会いたい人がいるから」

遙「元カノとか？」

陽介「残念ながら」

遙「そうなんだ」

陽介「なんでここって分かったの？」	遙「いつも通る道だから」	陽介「なんで来たの？」	遙「分かんない。気づいたら自転車漕いでた」	×	×	×	突堤の先に立つ二人。	陽介、ガラケーを耳に当てる。	携帯アナウンス「おかけになった電話は	電源が入っていないか、	電波の届かない場所に	あるため……」	陽介、電話切る。	遙「会いたい人にかけてるの？」	陽介「うん、繋がったことないけどね」	陽介、その場に座る。	遙、陽介の隣に座る。	遙「この花瓶は？」
-------------------	--------------	-------------	-----------------------	---	---	---	------------	----------------	--------------------	-------------	------------	---------	----------	-----------------	--------------------	------------	------------	-----------

陽介「さあ。ずっとここにゐるけど誰が何
 のために置いたのか。けど、動かし
 ちゃダメな気がして」
 数秒間の沈黙。
 遥「私、学校行っていないんだよね」
 陽介「理由聞いてもいい？」
 遥「クラスで色々あつて」
 陽介「そっか。誰かに相談できてる？」
 遥「相談とか苦手です：親は話したくな
 ったから話してくれればいいって。配信
 でお兄さんの話聞いてたらさ、私の思
 いも誰かに届くかなって思ったんだ
 よね」
 陽介「届くよ。俺にはもう届いてる」
 ×
 ×
 ×
 倒れた自転車を起こす遥。
 軽トラックに乗ろうとする陽介。

3 2	車内				
3 1	陽介のアパート 部屋内（早朝）				
	陽介「…」	遙「ねえ、明日も来る？」	陽介「今日で最後なんだよ。前々からそう決めてた」	遙「じゃあ、お兄さんの思いはどうなるの？」	陽介「…」
	アラームが鳴る。	遙「私、明日も来るから」	陽介、何も答えられない。		
	5 .. 0 0				
	陽介、アラームを止めてゆっく				
	起き上がる。				
	スマホ画面・3月12日 水曜日				

運転している陽介。
スマホは財布と一緒に助手席に置
かれている。

辺りを見渡す陽介。
遠くに見える突堤の先に遥が立っ
ている。

×

×

×

突堤。

空の花瓶の横に立つ遥。

陽介、背後から話しかける。

陽介「おはよ」

遥、振り返る。

遥「来ないと思った」

陽介、遥の横に立つ。

数秒間の沈黙。

遙「電話しないの？」
 陽介「携帯持ってきてない」
 遙「そっか」
 数秒間の沈黙。
 遙「かけた方がいいと思う」
 陽介、迷いながらもポケットからガラケーを取り出す。
 杏奈に電話をかけ耳に当てる。
 呼び出し音が鳴る。
 黙って横に立ち続ける遙。
 呼び出し音が鳴り続けている。
 陽介、繋がらないときのアナウンスが流れるタイミングを分かっているため既に諦めた様子。
 呼び出し音が途切れる。
 陽介、驚き動揺した表情。
 ×
 ×
 ×
 急いで軽トラックに乗り込もうとする陽介。

後を追いかけてくる遙。

遙「待って！」

陽介、振り返る。

遙「私も行く！」

陽介「いや、それ誘拐だから！」

陽介、軽トラックに乗り込みエン

ジンをかける。

遙、自分の自転車を軽トラックの

前に移動させ行く手を阻む。

陽介、窓を開ける。

陽介「ちよつと！」

遙「私が電話かけた方がいいって言った！」

陽介「……」

陽介、軽トラックを降り、遙の自

転車を荷台に積む。

陽介「乗って」

笑顔の遙、助手席に乗り込む。

ワクワクした様子の遙。

陽介、運転席に乗り込む。

陽介「家どこ？」

遙「え？」

陽介「許可もらいに行くよ。ダメだったら

諦めて」

遙「…わかった」

海沿いの道を走る軽トラック。

荷台に積んだ自転車がなくなっ

ている。

車内。

困った表情の陽介、助手席をチラ

ッと見る。

ワクワクした様子の遙。

遙「成長のきっかけを見逃すな！これうち

の家訓ね」

陽介「素敵なお母さんだね」

3 6 自動販売機前	3 7 ラーメン屋 店内	自動販売機の前に軽トラックが停まっている。 陽介、買ったお茶を助手席の窓から遙に渡す。 遙「ありがとう」 陽介、自分の分を買ったコーヒーを飲む。 陽介「朝ごはん食べた？」 遙「まだ」 陽介「…（じゃあ行くか）」 卓上に塩ラーメンが置かれる。 カウンター席に並んで座っている陽介と遙、無言でラーメンを食べ続ける。
--------------------------	----------------------------	--

	4 0		3 9		3 8
	気仙沼市 市街地	市街地を軽トラックが走り抜ける。	宮城県 気仙沼市 車内（昼）	三陸沿岸道路＋車内	
		車内。		まつすぐ伸びる開けた道を陽介が	
		運転している陽介、フロントガラ		運転する軽トラックが走っている。	
		ス上部に視線を向ける。		車内。	
		気仙沼市のカントリーサイン。		運転している陽介。	
				助手席で眠っている遥。	

4 1	4 2
旧本吉郡（もとよしぐん）沿岸	カフェあるばむ 駐車場＋店内

海沿いの道を軽トラックが走り抜ける。
 遙、窓を開け海風を浴びる。

駐車場に軽トラックが停まる。
 陽介と遙、車から降り店内に入る。
 扉には、あるばむと書かれた看板が吊るされている。

店内。

窓際にテーブル席が三つ、カウンター席は五つあり中では江藤和義（えとうかずよし）がハンドドリップを続けている。

陽介と遙、店内に入ってくる。

和義「いらっしゃいませ」

陽介、軽く会釈をする。

陽介「先ほど電話した成瀬です」	和義、ほっとした表情を浮かべる。	× × ×	店内の奥まった場所に並べられた	壊れた腕時計、劣化したカバンや	リュックサック、ハンガーラック	にはジャンパーや帽子がかけられ	ている。	メンテナンスやクリーニングはさ	れているが、使える状態とは言え	ない。	物色する陽介と遥。	和義、店奥からやってくる。	和義「自治体と協力して津波漂流物の可能	性があるものを回収しているんで	す」	遥、腕時計を見る。	時間が15時16分で止まってい
-----------------	------------------	---------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------	-----------------	-----------------	-----	-----------	---------------	---------------------	-----------------	----	-----------	-----------------

る。

和義「私たちは“思い出の品”と呼んでいます」

和義、ガラケーを取り出し、陽介に渡す。

和義「確認してください」

傷だらけの白いガラケー。

塗装は剥けているが、かめ子のフォルムをしたストラップがついている。

陽介、感情が溢れる。しかし、涙は流さない。

陽介「間違ありません」

和義「よかった。先月見つかったね、ダメもとで修理に出したら奇跡的にデータが戻ったんだよ」

陽介「本当にありがとうございます」

和義「私の方こそ。私も妻と息子が行方不明のままですね。だけど、こうやって思い出の品があるべきところに戻

			ることとで諦めずにいられる。だから、					
			私の方こそありがとう					
			黙って二人の話を聞いている遥。					
			和義「遥さんは今いくつ？」					
			遥「16です」					
			和義「そっか。じゃ震災のことはあまり					
			覚えてないかな？」					
			遥「はい」					
			和義「人には誰も必ず居場所がある。何					
			年かかったとしても必ずそこへ辿					
			り着ける。諦めなければね」					
			遥「…」					
			和義「おじさんのただの小言でした（笑）」					
			遥「…」					
			×					
			×					
			×					
			駐車場。					
			軽トラックに乗りも込もうとす					
			る陽介と遥。					

4 4	遥の自宅前	遥「泣いたりしないんだね」 陽介「大人だから」 遥、微笑む。 ける。 海沿いの道を軽トラックが走り抜	遥「見つかってよかったね」 陽介「うん」 運転する陽介。 窓を開け海風を浴びる遥。	4 3	車内	陽介「あの、自分が拾った物もここに持つてきてもいいですか？」 和義「もちろん。待ってるよ」 陽介、深く頭を下げる。	見送る和義。
-----	--------------	---	---	-----	-----------	--	---------------

軽トラックが停まっている。
 遙、軽トラックから降りる。
 軽トラックが発進する。

駐車場に軽トラックが停まる。
 部屋内。

陽介、寝室に置いてあるカラーボックスの上に三陸鉄道内で撮った杏奈の写真を立てかける。

杏奈のガラケーを取り出して開く。

突堤の先に置かれた花瓶に、五本のマーガレットが飾られた写真が待ち受けになっている。

陽介、静かに驚き写真フォルダを開く。

太陽に照らされ、光り輝く浪板海岸の写真。

砂浜に描かれたかめ子の写真。

活気あふれる商店街の写真。

商店街の肉屋で買ったであろうコ

ロッケの写真。

釜石駅の写真。

杏奈が映っている動画。

陽介「…（動画だ）」

陽介、動画を再生する。

三陸鉄道に乗っている杏奈。

杏奈「私は今、岩手県釜石市に来てます。

あっ、まだ着いてないか。もう少し

で着きまーす」

三陸鉄道リアス線 電車内（朝）

【十四年前】

車内を歩きながら動画を撮っている杏奈。

カメラを外側に向け車内を見せる。

杏奈「電車もかわいでーす」

カメラを車窓に向ける。

4 8	浪板海岸（早朝）	動画の杏奈「私の大好きな人です。早く告 げたい！チャンス作ってるぞ！」 動画が終わる。 陽介、涙が溢れ出す。 歯を食いしばり、声を押し殺すが、 静かな部屋に涙の音が響く。	4 7	陽介のアパート 部屋内	杏奈「景色も最高で、もう少しで海が 見えてくるって言っていました」 杏奈、陽介の目の前の席に座り陽介 を撮る。 眠っている陽介。
-----	----------	---	-----	-------------	---

誰もいない海岸。

津波の被害を受けたとは思えない

ほど穏やかで、静かに寄せては返

す波の音だけが辺りに響いている。

晴れた空の下に広がる海面は、太

陽に照らされて光り輝いている。

アラームが鳴る。

スマホ画面・3月24日 月曜日

5..00

陽介、すぐに目を覚ましアラーム
を止める。

×

×

×

片手鍋に火がつく。

陽介、魚焼きグリルを開け焼き鮭
を皿に盛る。

5 0													
車内													
め	陽												
子	介												
の	、												
ス	ミ												
ト	ラ												
ラ	ー												
ッ	に												
プ	吊												
を	り												
ひ	下												
と	げ												
撫	ら												
で	れ												
す	た												
る	か												
。													

スマホをホルダーに設置し、ア
 ムを調整してライブ配信を始める。
 その瞬間、視聴者数の欄に1と表
 示される。
 陽介、少し驚いた後に微笑む。
 シートベルトを締め、エンジンを
 かける。
 数秒の沈黙。
 陽介「玻璃（はり）の海」
 車が発進する。

朝靄（あさもや）の残る静かな住
 宅街。まだ人の気配がない細い道
 を、陽介の軽トラックがエンジン
 音を控えめに響かせながら進んで
 いく。
 車内。
 運転をしている陽介。

陽 介 「海 辺 の 村 に カ ヤ と い う 若 い 女 性 が 住
 ん で い た 。 カ ヤ の 住 む 村 に は と あ る
 不 思 議 な 言 い 伝 え が あ っ た 。
 | | 『 玻 璃 (は り) の 海 に は 思 い の
 か け ら を 運 ぶ 精 霊 が 現 れ る 』 と 。 」

シ ャ ッ タ ー が 閉 ま っ た 商 店 街 を 陽
 介 の 軽 ト ラ ッ ク が 進 ん で い く 。
 車 内 。
 運 転 を し て い る 陽 介 。

陽 介 「 玻 璃 の 海 。 そ れ は 夜 明 け の 限 ら れ た
 時 間 だ け 、 波 打 ち 際 が ま る で ガ ラ ス
 の よ う に 透 き 通 り 輝 く 現 象 の こ と 。
 村 の 人 々 は そ れ を 神 秘 と 呼 ん だ が 、
 誰 も そ れ 以 上 の こ と は 信 じ て い な
 か っ た 。 」

配 信 画 面 に は 車 窓 か ら の 景 色 が 流
 れ て い る 。

視聴者数1。
 助手席には白いマーガレットの花
 が五本、束ねられた状態で置いて
 ある。
 陽介「カヤは毎朝、その海に立ち続けた。
 理由は自分でも分からない。ただ、
 何かを探している気がしてならな
 かった。
 ある朝、カヤは波打ち際にきらめく
 小さなものを見つけた。それはガラ
 スのように透き通った花卉のよう
 な器で、溜まった海水の中にふわり
 と光る文字が浮かんでいた。
 『私の居場所を、ずっと探してる。』
 手に取った瞬間、器はふっと溶ける
 ように消えた。不思議と温かい感触
 がカヤの心を静かに満たしていっ
 た。」

商店街を抜け、開けた道を陽介の
軽トラックがスピードを上げて進
んでいく。
青信号の灯る交差点。
前方には上り坂の道路が続き、そ
の先は山々に囲まれている。人の
姿はない。
車内。
運転をしている陽介。
陽介「次の日も、その次の日もカヤは器を
拾い続けた。その文字はどれも短い。
でも、確かに誰かの“思い”だった。
『少しでも、会話ができた。』
『今日、泣かずに笑えた。』
『明日は少し怖いけれど、ひとりじ
やない気がする。』
器は毎日、違う形をしていた。時に
は花のように。時には羽のように。』
車が坂を上り景色に山が増えてく
る。

陽介	「けれどどれも手にした瞬間、ふっと
消えてしまう。その代わり、カヤの	心に思いが残っていった。
ある日の夜、カヤの夢に蒼光りをま	とう小さな精霊が現れた。その精霊
は何も語らずカヤに器を手渡す。	その瞬間、カヤの心に誰かと繋がる
ような感覚が宿った。精霊は優しく	微笑み、ずっと消えていった。」
トンネルに入る。	配信画面には車窓からの景色が流
れている。	視聴者数1。
陽介	「その日の朝、カヤははじめて自分の
思いを器に込めた。	海辺に立ち、祈るように手を合わせ
ると、手の隙間から光が漏れ出して	くる。手を開くと、その光が貝殻の
形をとった。	『誰かの思いに救われました。あり

がとう。』

車がトンネルを抜ける。

景色が開けると、車の右手に波板

海岸が広がっている。

太陽に照らされた海面が光り輝い

ている。

陽介「カヤはそれを玻璃の海に浮かべた。

器はすぐに波にまぎれ、遠くに消え

ていった。

数年後、朝焼けに照らされた波打ち

際に一人の少年が立っていた。その

少年が海から拾い上げたのは、貝殻

の形をした光る器。少年はそれを大

切そうに抱き、優しく微笑んだ。」

陽介、海岸沿いの道路に車を寄せ

て停車する。

エンジンを止めて、シートベルト

陽介「おはよー」	制服姿の遥が立っている。	陽介、振り返る。	遥の声「やつほー」	入れ、マーガレットの花を飾る。	足元の花瓶にペットボトルで水を	突堤の先に立っている陽介。	×	×	×	陽介、一呼吸置き配信を終了する。	視聴者数1。	ている。	配信画面には光り輝く海が広がっ	輝いていた。」	玻璃の海はその日、いつもより長く	だけで、世界は少しだけ優しくなる。	誰かと、確かに繋がっている。それ	陽介「出会うことはなかったかもしれない	を外す。
----------	--------------	----------	-----------	-----------------	-----------------	---------------	---	---	---	------------------	--------	------	-----------------	---------	------------------	-------------------	------------------	---------------------	------

遙	「次は私も連れてってね」	自転車スタンドを下げる遙。	介。	軽トラックに乗り込もうとする陽	×	×	×	陽介「そっか……」	遙「うん……あ、でもこれから学校……」	陽介「届けようか」	つていたことが分かる。	劣化具合から、長い間海をさまよ	遙が拾ったのは子供用の靴。	陽介、小走りで遙のもとへ。	遙「ねえ、これ」	に行く。	ちているのを見つけ小走りで拾い	遙、少し先の波打ち際に何かが落	陽介、微笑む。	遙「よかった」
---	--------------	---------------	----	-----------------	---	---	---	-----------	---------------------	-----------	-------------	-----------------	---------------	---------------	----------	------	-----------------	-----------------	---------	---------

陽介「分かったって」

遙、自転車にまたがる。

陽介「遙ちゃん」

遙、振り向く。

陽介「いつてらっしゃい」

遙、微笑む。

遙「いつてきます！」

遙、ペダルに足を乗せ漕ぎ出す。

陽介、軽トラックに乗り込み、遙

とは逆方向に車を走らせる。

晴天の中、浪板海岸に広がる海が

光り輝いている。

それはまるで、玻璃の海のように。

E
N
D